

開発途上国の障害女性—フィリピンでの調査を通じて

JETRO アジア経済研究所 主任調査研究員 もり そうや 森 壮也

DPI 女性ネットワークの『障害のある女性の生活の困難—人生の中で出会う複合的な生きにくさとは—複合差別実態調査』（以下、『複合差別実態調査』と略）を拝見させて頂いた。タイトルとは異なり、重い報告書であった。しかし、これが日本の障害女性たちが経験してきた、また今も経験している事実であることから私たちは目を背けてはならない。DPI 女性ネットワークの活動には、2007 年、韓国の障害女性当事者を日本に招いての講演会に参加させて頂いて以来、その活動に注目してきた。韓国障害者差別禁止及び権利救済等に関する法律で障害女性についての言及が特にあったことを受けての公開講演会である。また私の勤務先のアジア経済研究所は 2008 年にフィリピンのマニラ首都圏における障害者生計調査を実施したが、特に障害女性について注目して欲しいと、開発研究者の学会、国際開発学会会員からコメントがあったこともあり、障害女性についても言及して分析を行ってきた（森 2010、森・山形 2013）。その結果、フィリピンの障害女性については、同国がアジアでも男女平等度世界ランキング 7 位（週刊 Abroaders 編集部、2016）という平等度を誇っているのにも関わらず、障害男性に比べて、教育年数で障害全体で平均して一年以上短く、所得に至っては障害男性の三分の一という厳しい実情が浮かび上がっている。こうしたことから、同国の障害女性が置かれている不利な状況についてその原因や帰結について、さらなる調査を行う必要性を痛感した。

このため、マニラ首都圏があるフィリピン北部と、社会的環境も異なるフィリピン南部のセブ島で、2016 年に都市部と農村部の二地点を選び、障害女性（と障害児）のいる家計への生計調査を実施したところである。これに先立つ現地での個別ヒアリングでも、日本と同様に性的暴力やリプロダクティブ・ヘルスの面で障害女性が被っている被害の実態も明らかになっている。『複合差別実態調査』で、先進国と開発途上国と経済発展の段階が大きく異なっている両国であるが、障害女性が直面している問題は互いに酷似していることに驚きを禁じ得なかった。これが示す意味は何なのか、またこれに極度の貧困が加わる確率が格段に高いフィリピンの障害女性や子供の場合、日本とは何か違う問題も抱えているのか、開発研究者としては、明らかにしないとイケないと考えているところである。いずれにせよ、障害女性のあるべき、より良き未来のためにも、こうした形で少しずつ、障害女性の置かれている実態について各国で調査が進むこと、社会的に明らかになることを願っている。

【引用文献】

森壮也編『途上国障害者の貧困削減 - かれらはどう生計を営んでいるのか』岩波書店、2010 年。
森壮也・山形辰史『開発経済学の挑戦 IV 障害と開発の実証分析—社会モデルの観点から』勁草書房、2013 年。
週刊 Abroaders 編集部、「「アジアで最も男女平等」なフィリピンで、女性がのびのびと働ける 3 つの理由」、『週刊 Abroaders』2016.02.22 号 (<http://www.abroaders.jp/weekly/real/nanaho-nishiyama-6/>)